

おきわすれ

県立鹿児島中央高等学校 一年

波 木 歌 織

あの子が言っていたのはきつと、そういうことで。でも本当はもつと違う意味があるのかもしれない。だから今もずつと、あの子のことを考えている。それに意味があるのかなんて、考えたりせずに。

目の前の太陽が朝の重たい足をさらに重くし、学校へ行く妨げをする。道ばたにある昨日の雨の名残が、光をうけて僕に存在を主張してくる。まるで、いなくなっても忘れないでつて言っているみたいだな、と少しその存在をうつつとうしく思う。

「快音かいと。ふああふ。よつす」

瀬風せなだ。相変わらず眠たそうで、初めて会った入学式のことを思い出す。こいつ、いつもあくび隠さないよな。まあ、この気持ちよさそうな顔は嫌いじゃないから別にいい。

「よう、瀬風」

思っていたより高い声が出て、今の自分は少しだけ機嫌がいいのかもしれないということに気がつき、昨日なにかあつ

たのか思い返してみるのが、何も思いつかない。

「やつほつほ、かい、瀬風！」

「お、葵唯ちゃん」

あおも相変わらずだな。幼稚園の時から変わらない。僕も変わっていないのかもしれないけど。

「相変わらず元気だね、あお」

「かいはちよつと機嫌良さそうだねえ。なんかいいことあつた？」

「いや。特に何も」

「そっかあ。じゃあ、この天気のおかげかもねね。かい、この天気好きじゃん？」

そんなに太陽好きじゃないんだけどな、と知っているうちに話題が次に進んでしまう。まあ、中学生ってそんなもんだよな。

「あ、なあ二人とも進路希望調査の紙書いたか？」

ほとんどの場合、瀬風が話題を提供してくる。今日もそうだった。

「書いたよよ」

「僕も」

「え、まじかよ。なんて書いたん？」

「僕は附一だよ」

「おわ、さつすが。県トップじゃん。すご」

「すごくはないだろ。というか、あおもでしょ」

あおはいつも僕よりもいい点数をとる。だから頑張つて、

あおにおいていかれないように勉強した。

「ん〜ん。私、附一じゃないよ〜」

「……え？」

「お、そうなのか。どこ行くんだ？」

あおが附一に行かない。その言葉は信じがたいものだった。信じたくなかった。だって、僕とあおは約束していたから。

清明大学附属第一高校に行こうって、小学生の時から。あれは、あおの中ではなんてことない、ただの気まぐれだったのか。もう、忘れてしまっているのか。

「あれ、附一に行きたいって言ってなかった？」

二人の会話を遮り、精一杯明るい声で言う。

「あ〜、うん。そうだったんだけど、ちよつと、ねえ。することができちゃって。ごめんね〜、約束してたのに」

あおが附一に行かない。そしてそれを、一度も僕に相談してくれなかった。その事実がつかなくて、約束のことを覚えてくれていた喜びなんて、一瞬で消えてしまう。昨日のあとがまた、僕をきらりと刺した。見えてきた校門のそばにある桜の木の葉が、重く揺れている。

後になって思う。どうして、気付けなかったんだろう。

いちようは一気に落葉するらしい。一週間前までは多かった落ち葉も、今日はもうほとんどなかった。これでまた、寒さと戦うだけの十五分にもどる。地獄の外掃除を終え、教室に向かう。廊下の微妙な温かさにほっとしながら歩き続け、

教室のすぐそばに来た時、中から男子の騒ぎ声が聞こえた。

「え、瀬風、好きな人いるの？」

「だれだよ！」

「どんなひと？」

そんなざわめきの中、あいつのひとときわ大きな声が聞こえた。

「誰かは言わねえよ！ あ〜、頭がいい。んで、笑った顔がかわいい。あ、あと最近一緒にいる時間が増えたかも」

瀬風のうれしそうな声にまた、周りの人がはやしたてる。

たぶん、わかってしまった。あいつの好きな人は……あおだ。僕らが一緒に登下校を始めたのは今年度になってからだった。そしてあおは頭がいい。それに、笑顔もかわいい、と思う。

幼なじみとの恋はかなわないって、誰かが言っていた。幼なじみに恋しても、どうせどっから来たばつと出に取られてしまうって。分かってはいたけど、でも、信じたくはなかった。だとしても、結果は目に見えている。爽やかで運動のできるあいつに、勝つことなんてできない。

そう考えているうちに、後ろから急に声をかけられた。

「かくい？ 教室入らないの？」

ついさっきまで考えていた人物の登場に正直驚いたが、その驚きもさっきまでの焦燥感も、まるで存在しなかったかのように笑顔で答えた。

「あ、ああ。入る入る」

それから僕は、目をあまり向けられなくなった。瀬風にも、あおにも。受験の頃になると、少しずつ前みたいに戻っていたが、それでもいつも考えてしまった。

この時に聞いていなかったら、この先の僕らの未来も変わっていたのか。今さら考えてもしょうがないことを、僕は考え続ける。

いつもと変わらない通学路を、今まで通りあおと瀬風と三人で登校する。アスファルトの割れ目も、そこから生えた雑草も、校門に近づくに見える桜の木も、三年前からずっと変わらない。でも、それを見るのはきつと今が最後になる。たわいもない会話をするのも、これからどんどん減っていくのだろう。そんなことを考えているうちに、いつのまにか卒業式は始まり、終わっていた。将来への不安とか、同級生と別れる悲しみとか、そういうことはほとんど考えなかった。

最後のLHRが終わり、みんなが少しずつ教室を出て行く。一人でぼんやりしていると、急にあおが目の前に入り込んできた。驚いて、一瞬思考が停止する。

「かい？ どうかしたの？ もしかしてさすがのかいも、みんなとの別れを悲しんで……」

「そうじゃないよ。帰ろう」

というか、あおとも学校が分かれるかもしれないのに。みんなと別れることなんて、べつにどうってことない。結局、まだあおがどの学校に行くのかは聞いていない。

「いや悲しもうよ。もうちょっとクラスの人と仲良くなればよかったのに。あ、そうじゃなくてね、ちょっとだけ生徒会の後輩たちに挨拶してきてもいいかな？」

「ん？ あ、わかった。じゃあ瀬風と待っておくよ」

「ごめんね、結構待たせちゃうかも」

「了解。大丈夫だから、ゆっくり話してきなよ」

「ありがとう」

あおが出て行き、周りを見て気付く。教室には瀬風の姿はなかった。トイレにでも行ったのかと思っただけだったが、なかなか戻ってくる気配がしなかった。誰かに告白されてもしているのか。とにかく、しばらくの暇が決定した。

時間を潰すために、校舎をぶらぶら歩く。そして、窓側に飾ってある絵を見る。今まではなんとなく歩いていただけから気がつかなかったが、あおの絵も飾られていた。そして考え出す。あおはどこに進学するのだろう。今まで聞けなかったのは、怖かったから。自分だけがあおを必要としていることを、つきつけられてしまいそうで、あおだけ先にどこかへ行っただけ、僕は追いつけなくて……。

うじうじ悩んでいる自分がいやになり、外を見る。ここからはいつも、体育館の部活動生たちの声が聞こえてくる。その声が、とても嫌いだった。理由なんてなかったと思う。本当に、なんとなく。やっぱりたぶん、中学生なんてそんなもんだ。きつと、高校生になってもこんな感じなのだと思っただけ。

ぼんやり外を眺めていると、体育館の裏から出てくる人が見えた。今どき告白に体育館裏を使う人なんていないと思っていた。そして出てきた人を見て、目を見開く。瀬風だった。やっぱりあいつ、告白されていたんだ。本当にもてるよなあ。でも、瀬風を好きになる気持ちも分からなくはない。同性の僕から見てもかっこいいんだ。女子から見たらそりゃ、魅力的に違いない。

でも次の瞬間、息ができなくなつた。瀬風は後ろから出て来た子にとてもまぶしい笑顔を見せている。そして、その相手は、そう……。あおだった。

いつから二人が話していたのかはわからない。あおが教室を出て行ってから、三十分はたっていた。でも、つまり、そういうことだろう。僕は選ばれなかった。……選ばれなかった。ただそれだけだ。

先に帰るかどうか考えながら教室へ戻り、息を整える。そのうちに二人が教室に戻ってきてしまった。

「帰ろうぜ、快音」

「ごめんね、遅くなった」

さつき下で笑い合っていた二人が今ここにいる。僕ができるのは、何にも気付いていないふりをして、笑って答えるだけだ。

「大丈夫だよ。帰ろう」

そうして始まった最後の帰り道は、空気がいつもより堅かった。二人の間に浮ついた空気はなかった。むしろ、あまり

目を合わせないようにしていたように思える。僕に気を遣ってばれないようにしているのか、それとも、僕が信じたくなくて気付かないふりをしているだけなのかは分からない。でも、ただ一つだけ分かることは、今までのあの日々は、今日でもう絶対に訪れないものになった。ただそれだけだろう。どうして聞かなかつたのか、変化を恐れて行動しなかつたのか。まだ変えられる、何かがあつたのかも知れないのに。その何かがなんなのかは分からないけれど、でも。十五歳の時の僕を、僕は許さない。

あおと離れて二年がたった。僕は予定通り附一に進学、そして瀬風は附一のすぐ近くにある学校へ進学した。あおはというと看護学校へ進学した。そして、家族でその学校の近くに引っ越した。連絡は取っていない。……とれていない。時々母さんから話を聞くくらいだ。思っていたとおり、あの時のような時間は過ごせなかった。僕は看護師になりたいなんて、あおから聞いたこともなかったし。本当に何も相談せずに、自分の進路を決めてしまったんだ。もしかしたら、瀬風は知っていたのかな。だからって、どうするわけでもないけれど。

瀬風と僕は、毎朝通学で同じ時間になる。バス停まで一緒に行って乗り、瀬風が先に降りる。二年間、その繰り返しだ。その中でもいやと言うほど見せつけられる。瀬風という男のかっこよさ、瀬風という人間の優しき。僕らのところからここまで遠いから、同じ中学のやつなんてほばいないのに、

入学して一ヶ月もたたないうちにたくさんの友達ができていた。バス停を降りたとたんに周りに人がよってきて、すぐに中心になる。部活に入らず、クラブチームでサッカーしているらしいし、プロからの誘いもあったって聞いた。瀬凧との間にも、大きな差が出ている気がする。むしろだめなところがあつた方が嫌いになれたのに。

高二の夏休みを終えた頃に、瀬凧と帰りが同じになった。僕はある程度の時間まで、学校の図書館で勉強している。でもその日は、図書室で騒ぐうるさい陽キャから逃げるためにいつもよりも早く帰ったからか、初めて帰りのバスと一緒に戻った。

「おう、快音。初めてじゃね？」
相変わらず笑顔で爽やかに、僕の近くに来て、つり革を掴む。

「ああ、珍しいな」
「だよな。んてか、なんか今日暑くね？」

「そう？ むしろ寒いけど」
久しぶりに寒くなるって、今朝の天気予報でも言っていた気がする。でも、本当に暑そうだ。顔も赤い気がする。

「大丈夫？ 顔赤いよ。なんかあつた？」
七限が体育だった、とかならこんな顔が赤くなっているのも納得だ。あと考えられるのは、バスに間に合うように学校からダッシュしてきたのかな。

「なんもねえよ。あ、あれか、初めて快音と帰り道が一緒に

なつたからうれしくて、だな」

「……」
「うっ。んな顔すんなよ。冗談だつて。」

はあ。こんな冗談、急に言うなよ。無自覚タラシかよ、こいつ彼女いるくせに。あ……。そうだ、こいつはあおと付き合っているんだつた。考えないようにしていたのに、なんで思い出しちゃうんだよ。

「何も無いならよかったよ」

「あ、あ。告られた……。からかな？ なーんて」

「え？ 告られた？」

こいつやっぱりモテるな。高校入ってから何回目のことなのだろう。

「や、もちろん断つたぞ？」

「断つてなかったらびっくりだよ。他に好きな人いるくせに」

「は！？ 何で知ってんだよ！」

「知ってるわ。……。もう付き合って大分長いだろ？」

この二年以上、一生懸命考えないようにしていたんだ。なのに、人の想いも知らずに……。そういえば、瀬凧は気付いていたんだらうか。僕のおおへの想いに……。気付いていたわけないか。あの鈍感な瀬凧だもんね。

「……は？ 付き合ってる？ 誰とだよ」

「あおとでしょ。見た」

「は？ 何を」

「卒業式の際に、二人で体育館の裏にいたでしょ。出てくる

ところ見てた」

「はあ？」

何で瀬風が怒ってきているんだよ。見たことを隠していたのは確かに僕も悪いかもしれないけど、ちゃんと見られないように気を配れていなかったのは瀬風だろ。そんな怒られても。思い出して僕がいらいらしてくるんだけど。

「まさか別れたとか？ いつだよ。ほんと僕には何も教えないんだね」

「快音、おまえほんとに何言ってるの？ もしかしてあれか？ あれは、俺と葵唯ちゃんがたまたま同じところで告られたってだけだぞ？ なんか勘違いしてねえか？」

……は？

「その顔。やっぱ勘違いしてんな。俺と葵唯ちゃんは、付き合ってもなんでもねえからな？ だからかよ、あの後ちよつとよそよそしくなったの」

「え、ほんとに言ってる？」

「こんなこともし嘘で言ったらやべえだろ」

この瀬風の台詞が本当だとしたら……。これほど無駄な時間はない。付き合っているとしてもせめて想いを伝えればよかったのに。あの時の自分に腹が立つ。もちろん、今の自分にも。付き合っていないと聞いた今でも、あおに告白する勇気が出ない。

それから僕は、いつまでたってもどんなときでも、あおと一緒に過ごすこの学校を考えてしまう。小学校の頃から思い

描いていた学校生活が、本当になることはなかった。いつも隣にいたあおは、もうここにはいない。でもせめて、高校を卒業してからはあおと一緒にいたくて、僕は医学部を目指すことにした。幸い、あおに負けないように勉強を一生懸命してきたおかげで、どの大学になっても大丈夫だろう。これで、前のような後悔はしなくてすむ。そして、一緒の大学に行ったら。その時は大学生の肩書きが僕の背中を押してくれるだろう。そう信じた。

三年生の春、瀬風に言われた。

「快音、いつまで葵唯ちゃんのこと考え続けてるんだよ。告れないならもう忘れろよ、いいかげん！ 今を生きろって！ 今近くにいる人見ろって……」

この時の瀬風はとても苦しそうで、だけど、何が瀬風にそんな表情をさせているのか分からなくて。でも、その時の僕はうらやましく思った。何をかはわからない。そんなにストリートに感情を伝えられることなのか、そんな表情をするほど好きな人がいることなのか、そんな表情をさせるほど想われている人がいることなのか。ただ僕は、そう言う瀬風から逃げた。

この時この言葉に、瀬風に、自分に、あおに。向き合っていたなら何か違う結末があったのかもしれない。でも、逃げてしまったせいとその言葉たちは居場所がなくなってしまったのだろう。いつだって何かの居場所を奪うのは、自身の弱い心なんだ。

三年生の秋、家に帰るとあおがいた。僕の家のリビングで、母さんと話していた。

「快音、おかえりなさい」

「おかえり〜かい。やつほ〜」

久しぶりに見たあおは、僕の記憶にいるあおではなかった。仕事や話し方は変わらないものの、顔がどこか大人びて化粧をしているようで、何も変わっていない自分を少し恥ずかしく思う。

「じゃあちよつと買い物に行ってくるわね。遠くまで行くから、遅くなると思う」

「は〜い！ いってらっしや〜い」

当たり前のように母さんは、僕とあおを二人きりにした。

「久しぶり！ 元気にしてた〜？」

変わっているのに変わらない。そんなあおに少し安心して、さっきまでの驚きとかは無かったかのように平然と答える。

「ああ。あおは？」

「もち元気！ やっぱかいはいのまんまだねえ！ 安心して」

満面の笑みで答えてきた。やつぱりあおも、変わっていない。見た目は変わったけど、あおはあおのままだ。

そのまま僕たちはアルバムを見た。たわいない思い出話をするその時間が、僕を小学生の頃に連れ戻してくれる。受験生というしがらみから抜け出していた時間は、短くてそれで

いて濃くて、ずっといたかった。それでも終わりは、あおの言葉と共に始まった。

「ねえ、かい。私、子どもがほしいんだあ。自分の、子どもが」

「前も言ってたね。産みたい、育てたいって。どうしてまた急に？」

質問なんてしなければよかった。話をそらせばよかった。そうしたら、せめて、幼なじみの関係は保てたのに。どうして壊れてしまったのだろう。壊してしまったのだろう。それまで、少年の自分に戻っていたことがいけなかったのか、受験勉強で疲れていたのがいけなかったのか、あおをこんなにも好きになってしまったことがいけなかったのか。そんなこと分らないけれど言えることは、この日、僕とあおは仲のいい幼なじみでは無くなってしまった。

今の僕ならこの時のあおを受け止められるのか。正しい反応ができるのか。分からないし分からなくていい。あの空間には、時間には、正解なんて無かった。

「子どもがほしいの」

そう言っであおの手は、僕に伸びてきた。あおの香水のにおいが、ツンと鼻をかすめる。

あおがこの世を去ったと聞いたのは、大学初めての梅雨を迎えてからだ。あおはこの病気と、五年間闘っていたようだ。母さんはそのことを知っていて、お見舞いにも行って

いたらしい。そして、あおが僕には口止めしていた。

何も言葉にすることは無い。言葉にできる感情は無い。あ
るのはただ、あおがないその事実だけ。

後悔しても、意味は無い。あおにとつての最期の望みを、
叶えることはできなかった。あおのことを理解しきれなかつ
た。行動も、言葉も。あおはいくつも僕に問題を与えていく。
どれもが何年かけても解けそうに無い問題だ。

入社して七年がたった。僕も瀬凧ももう二十九歳だ。二人
とも地元就職して一人で暮らし始め、それなりの暮らしを
送っている。三ヶ月ぶりに予定が合い、仕事帰りに飲むこと
になった。会社を出てみると、昼にあった通り雨のせいでも
だ道がぬれていた。

酔いが回ってきた頃、いつもみたいに瀬凧が持ってきた話
題は、あおのことだった。

「葵唯ちゃんのことだけどき」

「……なに？」

「いや、もう吹っ切れたのになって」

「吹っ切るも何も。もういない人だよ？ それに、僕が最後
に会ったあおはもう、僕が知っているあおじゃなかった」

瀬凧にじっと見られているのが分かる。目を合わせないよ
うに、グラスについている水滴が流れ落ちていくのを見つめ
る。

「どういうことだよ」

「僕が好きだったあおはね、自分の目的を叶えるために努力
する人だった。周りの人には迷惑をかけないように、独りで
努力する人だった。でも、自分の心には嘘をつけなくて、妥
協をしなくて」

「ああ。そうだな。それが葵唯ちゃんだ」

瀬凧の優しい声が聞こえる。

「……でも、あの日のあおは妥協をしたんだよ」

「妥協？」

息が詰まる。自分で言っていてむなしくなる。自分は妥協
として使われたなんて、そんなこと認めたくなかった。でも、
あの日のあの行動は、そういうことでしかない。僕がたくさ
んの時間をかけて導きだした答えは、そんな、認めたくない
ことだった。

「快音、お前知ったんだよな、葵唯ちゃんの気持ち。その上
で断ったんだよな？」

「……気持ち？」

瀬凧の方を見る。想像通り、昔と変わらない目で、まっす
ぐ僕を見ていた。

「高三の秋。葵唯ちゃん泣きながら笑って言ってたぞ。『いい
の。人生なんてこんなもんでしょ？』って。快音の家に行っ
たことも聞いた」

「……」

「快音がどう考えていたかは分からないけど、葵唯ちゃん

が泣いていたことも含めて出した結論か？ それでいいのか？」

「……僕は何か大きな間違いをしていたのかも知れない。あおは、誰でもよくて迫ってきたのでは無くて、もしかしたら……」

「ねえ瀬風、今だけちょっとぬぼれてもいいかな」

「いいんじゃないね。今快音の頭の中に出た結論が、多分答えだよ」

「ありがとう。ごめん瀬風、ちょっと行ってくる」

「おう。……その方が、俺も先に進めるよ」

瀬風がなにか、小さくつぶやいた。

お金を机の上に置いて店を出る。まだ道には、雨が残っていた。ヘッドライトが、その存在を教えてくれる。

しばらくして、実家の前についた。リビングから光が見える。まだ、誰か起きている。中に入ると、見えたのは母さんの姿だった。

「快音？ どうしたの、こんな時間にいきなり来て」

驚いている母さんに尋ねる。

「あおについて、知っていることを教えて欲しい。なんでもいいから。あおにちゃんと、向き合う」

それを聞いた母さんは、目を見開き、それから優しくほほえんだ。

「分かったわ。こっちにいらっしやい」

そう言ってテレビの前に促される。そして母さんが見せてくれたのは、あおの映像だった。大きなテレビに映し出されるあおは、何本ものチューブを身体に通されて呼吸器をつけられ、肌は白く腕は細くなっていた。そんなあおが、少しずつ小さな声で語り始める。

『かいはいいつも、私のこと私より知っていた。いつも、何も言わずに支えてくれた。そんなかいが大切に壊したくなくて。あの日のことは後悔してないんだ。想いを口で伝えたくわけじゃないけど。病人としてじゃなくて、昔と同じように話せた。いつもの私たちに戻っていた。それだけで、十分』

静かに、潤んだ目で言葉を紡いでいく。久しぶりに見たそんなあおの姿に、やっぱり安心した。あおは変わっていないかった。変わらず、僕が好きなあおだ。

「……あおはいつも、僕のことを僕よりも知っていた。僕を大切にしてくれていた。そして、僕よりも強くて、僕よりも何倍も生きていて」

話している間も、あおの声が聞こえる。変わらず、ふわりと笑っている姿が見える。

『かいはね、雨上がりの天気が好きなんだよ。晴れよりも、何よりも！ 雨上がりの地面にいる、水たまりみたいになりたいなあ。そしたらきつと、どんな時でもかいは私を見つけてくれる。忘れないでくれる』

あおが急にこちらを見て言った。少しづつ霞んでいく。『かい。生きてほしいの、ちゃんと。生きよう、ちゃんと』

自分だけの家への帰り道で、また雨の名残を見る。そして静かに想う。あおはずっと、生きている。ただ存在しているだけじゃなくて、ちゃんと、生きている。

後から考えたら、どれもこれもがあおからのメッセージに感じてしまって、僕はずっと考え続けていた。向き合うことから逃げるくせに、その罪悪感を隠すために僕の中だけで考えた。そうすることだけがあおと僕をつないでくれていると思い込ませて、考えることによって安心していた。でも、あおが求めていたのはそういうことではなくて。もっともつと考えたら、他にも答えが見つかるかも知れない。でも、ずっと過去の言葉にとらわれ続けるわけにはいかない。あおが生きているときですらなんとなく生きていた僕に、あおが最期にかけてた言葉だから。

あの子が言ったのはきつとそういうことだ。僕は進む、生きる。でも、考えることはやめない。たくさんの、記憶の中にいるあおと生きていく。あおが望んでいることは少しずれてしまうとしても、僕は考え続けることに決めた。そのことに意味なんか無くても、それでいいんだ。あの子にも、言葉にも、たくさんの問題にも、僕が居場所を作るために。何も、取り残さないために。